

---

# もしもしハイハイ

瓢六玉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もしもしハイハイ

### 【Nコード】

N3371J

### 【作者名】

瓢六玉

### 【あらすじ】

雪のクリスマスにおとーさんが聴いたター君の声は、お酒による幻聴だったのか、それとも・・・。

## (前書き)

これはホラーというよりもファンタジーかもしれませんが、霊界を描いたものなので奇談のジャンルとしました。

静かな日曜の午後でした。

朝からチラチラと雪が降りだして、ひさしぶりにホワイト・クリスマスになりそうな予感がしました。

ター君のお父さんはおコタにトップリと足をいれながらひとりでボンヤリお酒を呑んでいました。

それは葡萄で出来たワインというお酒です。

ツルのように足の長いコップのなかでワインは金色にキラキラ、チカチカ…と輝いていました。

お父さんはワインをチビリ、チビリやりながら、どんどん白くなつてゆく外の景色をながめていました。

空からヒラヒラ舞い降りてくるちぎれた綿のような雪を見つめてみると、なんだかだんだんと自分の方が雲の上へ、スウーッと昇つてゆくような感じがしました。

おコタの上に頬杖をつきながら、ぼんやり部屋のなかを見まわしているとお父さんはホコリをかぶった小ぢやな赤いプッシュフォンを見つけました。

それは、ター君のものでした。

白い数字が書かれたボタンが可愛いらしいプッシュフォンです。

ター君のプッシュフォンをおコタの上にトンとのせるとお父さんはしばらくそれをながめていました。

ボタンが「1」から「0」まで十個ついています。

お父さんは「1」のボタンを指先でチョコンと押してみました。すると、

「ポーン！」

という、きれいな音が部屋中に鳴り響きました。

「2」のボタンを押すと、今度は少し高い音が

「パーン！」

と、鳴りました。

お父さんは、「3」も「4」も押してみました。

そのたびに、

「パーン！」

「ポーン！」

と、澄んだ音が鳴り響きます。

そうして、はじめてそれらのボタンが「ドレミファソラシド」の順になっていることに気づきました。

お父さんは出鱈目に三つのボタンを押してみると

「ポン。ピン。パーン！」

と不思議な響きが部屋中にこだましました。

お父さんはワインをガブリと一口飲むと足の長いコップをおコタの上にコトンとおきました。

金色のワインはゆらゆら揺れながらチカチカと、小さな十字架の形をたくさん光らせました。

\*\*\*

お父さんは受話器を左手でとると、それを耳にあてて右手のひとさし指で「1・3・5・8」という順でボタンをゆっくり押ししました。

すると今度はとってもキレイな音がお部屋いっぱいに鳴り響きました。

それは「ド・ミ・ソ・ド」という和音だったからです。

でも、お父さんの耳には受話器をあてても何も聞こえませんでした。

本物だったら、

「プー」

とか

「ツウ」

とか聞こえるはずなのに。

\*\*\*

お父さんは、しばらく受話器を耳にあてたままボンヤリとおコタの上をながめていました。

懐かしそうにター君の電話をながめていました。

お父さんは唾をゴクンと呑み込むとチョツとかすれた声で

「もしもしィ！」

ター君ですかァ？」

と、明るく言ってみました。

それから、しばらくお父さんは、また黙ってしまいました。

お父さんの目が、少しだけ光りました。

ワインを一口飲みました。

「ター君。

お父さんだよ。

元気ィ？」

と、明るい声でいうと今度はお父さんの目から

大きな大きな泪の玉が三つぶ、おコタの上にボロン！　ボロン！

ボロン…と落っこちました。

しばらく時計の音だけがコチツ、コチツ…と部屋中に響いていました。

その時ですッ！

虫が鳴くようなかすかな音が受話機の向こうから響いてくるではありませんか。

それは糸電話の声みたいに小さく震えながら虫の囁きと同じぐらにかすかに

「もしもしィ。」

もしもしィ…」

と、言っているようです。

それは、とっても、とっても懐かしい声の響きでした。

「もしもしィ？」

もしもし？ …

お父さん？

お父さんなの？ …」

お父さんはハッとして体を起こすと

「ター君かいッ？」

と驚いて大声を出しました。

すると電話の向こう側の男の子も驚いた声で言いました。

「お父さん？」

ほんとに、お父さん？」

時間が真っ白になって止まってしまったようでした。

「うんうん…」

お父さんは、何べんもうなずきました。

男の子が言いました。

「うそオーッ！」

信じられないヤッ！」

たしかにそれは間違いなくター君の声でした。

\*\*\*

お父さんは耳の穴をかつぽじってター君の声をちょっとだって聞きもらすまいと思いました。

ター君が、電話の向こうにいるんです。

「お父さん。」

ぼく、元気だよ。

もうね、どっこも

痛くなんかないし：  
手だって、足だって

ホラーッ！

ちゃんと、動かせるんだよオー！」

お父さんはウンウンうなずきながら鼻をすすりました。

泪が、あとから、あとからポトポト、ポトポトこぼれ落ちました。

「ター君。

お父さんなァ…」

そう言うとお父さんはそのあとが言えません。

ター君の声は、お父さんにやさしく言いました。

「お父さん。

ぼくね…」

さびしくなんかないよ。

だってね、おじいちゃんも、

おばあちゃんも、一緒だもん。

タロタロだって…」

シッポふって、ここにいるんだよ」

タロタロは、ター君と散歩していたときに一緒に車に轢かれまし  
た。

お父さんの耳には、たしかに

「ウォン！ ウォン！ ウォンッ！」

と元気に吠える、タロタロの声が聞こえました。

「お父さん。

元気だね。

ぼく待ってるから…。

それまで、おじいちゃんたちと一緒にだから安心だよ…」

お父さんは

「うん…」

と、ひとつうなずきました。

そして、また一つ泪をポタリと落としました。



「さよなら。お父さん…」  
「……………」

\*\*\*

お父さんはもっともっとター君とお話をしたいと思いました。  
でも、それが出来ないことだということを感しました。

「ぼく待ってるよ。お父さん…」

ター君はやさしくお父さんに言いました。

「うん…。」

さよなら…。

ター君…」

お父さんは、やっと、そう言いました。

そして心のなかでもう一度

(さよなら…)

と、つぶやいてしずかに小さな受話器をおきました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3371j/>

---

もしもしハイハイ

2010年12月14日20時53分発行